



本校周辺(1981年)



本校周辺 (2010年)

左上の写真は1981年の本校周辺である。その当時の様子について『創立10周年記念誌』で長倉昌洋さん（2期生）は次のように書いている。

私がこの母校に通っていた頃、グラウンドの向こうは海でした。国道58号線から当時はまだ完全に舗装されていなかった道を学校に向かう途中、この校舎のバックに映える青い海に時折、**感激**した事を憶えています。

当時、本校周辺は住宅もなくススキが生い茂っていたという。私は上の文章を読んで、校歌の

「東支那海 紺ぺきに 染めて 世紀の陽はおどり」 が頭に浮かんだ。

さて、開校式の資料(昭和56年)には、**新城久雄校長**が**校訓(誠実・自主・創造)**について次のように書いている。

「**誠実**」とは、強く、正しく、美しい心を持ち、生活面においても、学業面においても自ら省みて、**己に恥じない真面目な真剣な生徒になる**ということである。また、「**自主創造**」とは、いかなる困難にも動じない**不屈の気概と勇気**をもって、自ら進んで学業に励み、常に目標に向かって努力を重ね、**自己を開拓**していくことを意味します。



新城校長の思いは校歌に反映されていると思われ、ここで該当箇所を紹介したいところだが紙幅の関係で省略する。校歌には学校の建学の精神、こんな生徒に育ててほしいという願いが込められている。私としては、朝流れる校歌を皆さんが口ずさみながら、充実した一日にする決意をしてほしいところだ。

次に、**第1回入学式で新入生代表**として宣誓を行った大井肇さんの言葉を紹介しよう。

新設校と既にある学校との大きな違いは何か。それは**新設校には過去はなく未来だけがある**と言うことです。大事なことは、**やる気、つまり気迫**をもつことだと思います。僕等は、過去に惑わされることなく自分自身の道を歩いて行くことができるのです。ほかの誰かがつくり出すのではなく僕等自身の手で切り開いていくのです。ここに集っている僕等、**皆が努力することによってこの学校の伝統をつくりあげていく**のです。

本校40年の歴史には、良い時も悪い時もあった。『創立30周年記念誌』に次の記述がある。

草創期から創立10周年までの進学校としての文武両面における輝かしい実績、創立20周年前後の困難で難しい課題を克服してきた時期。創立30周年を迎えるにあたり生徒達は勉強はもとより、文化面、スポーツ面でのめざましい活躍がある。

学校の歴史は生徒・教師・保護者で創り上げていくものだ。これからの宜野湾高校がどのようになるかは我々次第なのである。創立40周年を本校の輝く未来に向けたスタートの年としよう。結びに、冒頭で取り上げた長倉さんの文章を紹介する。



学校のまわりにはまだ雑草も多く、歩きにくかった路も、今では平らできれいな舗装道路へと変わっています。あの路を歩きながら考えた事や見た光景が、**目を閉じれば色あせながらも思い出**されます。暑い日も寒い日も、雨の日も風の日も、ひたすら我が校舎へと歩いた路。**目に映る景色は変わっても**、母校で学んだ思い出はいつまでも私の胸の中で変わらずに残っています。校舎の片すみ、そしてあの頃の先生方の顔はいつまでも**あの頃のまます**。

3年生・2年生・1年生の皆さんが「今、目を閉じて思い出すことは何だろう?」。それぞれの学年が本校で過ごす日数は違うが、「**母校で学んだ思い出は、いつまでも私の胸の中で変わらずに残る**」ものだとしたら、ありきたりの言葉だが、**悔いのない学校生活を送りたいものだ。** 沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎